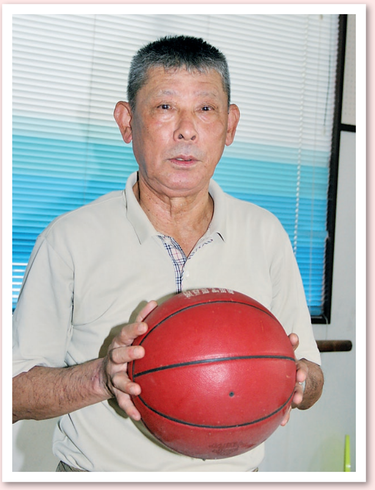
恩師を訪ねて

落合　正義先生

（在職＝昭和三十八年四月～四十九年三月）



昭和三十八年一学期早々の体育授業のひとこま。雨だったため、定番の運動場でのサッカーから体育館のバスケットボールに切り替わった。そこで、クラス全員が赴任してきたばかりの「おちあい」の模範演技に目を丸くした。軽やかな身のこなしから放つシュートは、どんな角度からもことごとくリングに吸い込まれていく。

それもそのはず。わが「おちあい」こそ、静岡教員チームのポイントゲッターだったのだ。当時の静岡教員は、バスケットボールの国体教員の部や全国教員大会を何度となく制した、いわば常勝軍団。その強豪チームが誇るシューターの妙技は、生徒たちの心をつかむのに十分だった。

静岡市出身。中学（城内中）時代はサッカー部に籍を置いていたが、進学した静岡市立高ではバスケットボールを選んだ。「あのころの市高のバスケットは県内の強豪。上級生のプレーを見て感動した」のが転身のきっかけとなった。転身後はもちろんバスケットボール一筋。大学は恩師の勧めもあって、日体大の門をたたいた。けがに悩まされながらも主軸として活躍。「実業団でプレーすることも考えた」というが、指導者に魅力を感じ、教師の道に進んだ。

初任校は富士市吉原一中。一年後に吉原商高に移り、さらに一年後の三十八年に東高にやってきた。「東高といえばサッカー」とのイメージを抱いて教壇に立ったが、その浸透ぶりは予想をはるかに超えていたという。「雨が降っても、体育はサッカーと騒ぐんだから」と当時を振り返って苦笑する。

部活指導でも、雨は懐かしい思い出として残っている。赴任直後、雨が降るとバスケットボール部員は帰宅部に変わった。体育館がサッカー部の練習場になるからだった。「あれにはびっくりした」といい、ます、雨の日でも体育館の四分の一を確保することから始めた。「素人の集まりのようだった」バスケットボール部の意識改革に努めて、戦う集団に導き、在職十一年間で県中部大会優勝四回の実績を残した。

まだ、校風におおらかさが残っていた三十年代後半から、受験戦争が激化し始めた四十年代後半までの在職中、時の流れとともに生徒気質も一間違いなく変わっていった」と実感を込める。「悪さをしても隠し立てしないので憎めない。それが周囲の規制が厳しくなってくるのに伴い、ここそこするようになった」。飾らない表現で、規制社会の弊害を指摘した。

東高から島田高、藤枝西高を経て退職。県バスケットボール協会副会長などを務め、昨年から同協会顧問。

七十二歳。藤枝市藤岡在住。

（文責　会報委員K）

随想

美術とともに

美術家

岐部 琢美

（38回）

高校の美術教師を三十七年間務め、現在は地元の大学で立体造形論等の講義科目と金属造形等の実技科目を教えている。なかなか美術教育を抜け出せないままに至っているが、少しでも美術を志す若い人達のお役に立てればと思っている。教師との二足の草鞋を履いたまま四十年近く鉄を素材とする立体造形作品を造り続けてきたが、手強い相手を選んだものだと感じているのが正直なところである。「彫刻とはマッス（量塊）である」という彫刻理論には背を向け、「彫刻とは表面である」ことの意味を考えることに長い時間を費やしたように思う。また、量に対する日本と西洋の根本的なギャップが自然と空間、時間への移行となって作品を展開させてきたように思う。一時、ジャコメッティ（スイスの彫刻家）に傾倒し、西洋的な「存在論」に夢中になったが、いつのまにか東洋的「存在論」に移行している自分に危うさを感じつつ、絵画的「ものの見方」が優先される現代の中にあって、いまだに「彫刻とは何か」を模索している。

昨年、フランス（カストル国立アートセンター）での作品発表の機会を得た。今まで海外での作品発表は、フランス（リヨン）、フィリピン（マニラ）、タイ（バンコク・チェンマイ）、韓国（済州市）等で行なってきたが、なかなか時間の余裕がなく、作品を輸送するのみであった。カストル展は丁度春休みと重なり、絶好の機会に恵まれた。ドゴール空港からオルリー空港へ、オルリー空港からトゥールーズ・ブラニャック空港へ、ブラニャック空港からカストルへの長旅であったが、企画者であるリヨン大学のマリー先生の献身的なご尽力のお陰で日本現代美術の一端を紹介することができた。現地で作品に対する生の声を聞き、作品が共感をもって受け入れられたことは、大きな励みとなった。短時間の滞在であったが、カストル市民の暖かさとカストル旧市街の素朴な風景は忘れがたい。今年も、六月の三島での個展、七月の瑞浪芸術館でのグループ展、八月の浜松での日本・タイ交流展、十月の遠州横須賀街道での文化展、十二月の東京での二人展を企画していただいている。

発表し続けられる環境と我が健康に感謝しつつ、制作に励んでいる。

最後になりましたが、母校の益々のご発展を心より祈念いたします。

新幹線を鉄道の母国・英国へ

日立製作所　執行役常務

鈴木 學

（39回）

私は、昭和三十八年四月に藤枝東校に入学し、「ミツンコ」こと太田先生の担任クラスになり、三年間同じ仲間とともに青春時代を謳歌いたしました。この時代の級友とは毎年私の帰省にあわせ、同級生がやっている焼津の「黒潮」に集まり、毎度同じ話の繰り返しながらも東京での会社生活を元気にさせる糧とさせていただきました。私自身はここ十年位日本が誇る高速鉄道技術を海外に売り込むことに注力してきました。幸いなことに台湾、中国、英国に日本の高速鉄道技術は採用され、地元の皆様に愛用されております。ことに英国は我が社単独での挑戦であり、様々な苦闘の末、二〇〇九年十二月にロンドン・セントパンクラス駅からアシュフォード駅経由ケント地方に無事営業運転にこぎつけることができました。ご存知の様に日本は明治五年（一八七二年）に英国から鉄道技術を学び新橋・横浜間を開業させました。それから百三十余年を経て鉄道の母国英国に日本の鉄道技術が輸出され、納期通りに完成させ、その信頼性と安定運行を実現させていることは鉄道に携わる人間のみならず多くの人たちに賛辞されております。その成功は欧州大陸にも注目を浴び、スイス、ドイツ等からも引合いがきております。鉄道は他の交通機関に比べて、環境にやさしく低炭素、省エネ社会が実現できる交通機関であり、中国、インド、ブラジル等の新興国でのインフラ整備はもとより、先進国でもリノベーションによる再整備の案件が時代の追い風を受け、数多く出てきています。歴史的にグローバル展開をしているシーメンス等の欧州の巨大メーカーと、政府の支援を受けた韓国、中国メーカーとの激しい競争をしております。信頼性・定時性で一歩リードしている日本の鉄道技術が今後も勝ち残っていくために、政府の成長戦略を踏まえリソースの糾合を図っているところです。私自身、東海道二十二番目の藤枝宿の前のあった上伝馬に生を受け、毎日店の前の東海道を眺めながら、この道はお江戸日本橋につながっているのだと思い、青雲の志を持ち東京に出て、早四十五年が過ぎました。欧米先進国に追い付きたいと一生懸命坂を登ってきました。そろそろ次の時代にバトンを渡す時期が来ました。少子高齢化の日本、アジアを中心とした成長を取り込めば、まだまだ大丈夫です。我々の世代が藤枝から東京を目指したように、次の世代は日本から世界を目指していただきたいと思っています。

日立が英国に納めた高速車両

狂言師の私 神戸より

狂言師

岡村 和彦

（58回）

大蔵流狂言方として神戸を中心に能楽の舞台に立っています。（能楽とは能と狂言の総称で、シテ・ワキ・囃子・狂言などそれぞれのパートは専門職制になっております）

土日は正式な能楽公演、平日は仕事と調整しながら小学校から高校まで全国各地（ときには離島まで）でワークショップ等生徒たちと交流しながら舞台に立っています。昨年秋、狂言師としての卒業論文といわれている『釣狐』という曲を初演しました。能楽の世界では、披き（ひらき）といい、芸歴として必ず問われる曲です。また今春は欧州公演に参画する機会をいただきました。

きっかけは大学のクラブ活動でした。冷やかし半分に覗いたばかりに大歓迎を受け、断るに断れなくなり自棄気味に入部したのがはじまりでした。観世流の謡と仕舞、大蔵流の狂言の稽古はそれなりに面白く、生涯の趣味にしてみようというくらいは打ち込んでいたと思います。

転機は、初めて観た師匠の『釣狐』。能にも勝る底知れぬ気味さと緊張感、溜稽で軽妙な狂言の芸にこれほど深く広い世界があろうとは、これは趣味では極めることはできないと、師匠に押し掛けるように弟子入り志願、在学中からプロの修行をはじめました。師匠は善竹（ぜんちく）忠重師。広辞苑をひくと能楽師では唯一人個人名が掲載されている故善竹弥五郎師の家系です。世襲制の厳しい世界で、幼少からの経験もなく血縁者の頼りもない私が舞台に立っていることは、師匠の懐と志の深さに負うところが大きく、私一人の努力では存在すらままならないのは言うまでもありません。

わずかでも私に継続する力があったとすれば、藤枝東での野本寛一先生の存在を第一に挙げたいと思います。志望校に行けず落胆する私に浪人を薦め、なおも失敗を重ねて失意のまま大学入学した私を文字通り叱咤激励して下さりました。その上、時を同じくして関西の地に居を構えられ、折にふれ警咳に接し、道は違えどその大きな背中を追いかけているうちに今日まで至っているというかんじです。もちろん、遠く及ばずではありますが。

それにしても、葉梨の農家の長男でありながら、生涯の芸道修行の地を関西に求めてしまった私に望郷の念はやまず、盆と正月の帰省は父母の息災だけが頼りというのは藤枝人を自負するのも未だ親がかりのようで何かうしろめたさえ覚えています。かなうことなら、能楽を通して故郷への報恩ができないものかと願う日々であります。

美術とともに

美術家

岐部 琢美

（38回）

高校の美術教師を三十七年間務め、現在は地元の大学で立体造形論等の講義科目と金属造形等の実技科目を教えている。なかなか美術教育を抜け出せないままに至っているが、少しでも美術を志す若い人達のお役に立てればと思っている。教師との二足の草鞋を履いたまま四十年近く鉄を素材とする立体造形作品を造り続けてきたが、手強い相手を選んだものだと感じているのが正直なところである。「彫刻とはマッス（量塊）である」という彫刻理論には背を向け、「彫刻とは表面である」ことの意味を考えることに長い時間を費やしたように思う。また、量に対する日本と西洋の根本的なギャップが自然と空間、時間への移行となって作品を展開させてきたように思う。一時、ジャコメッティ（スイスの彫刻家）に傾倒し、西洋的な「存在論」に夢中になったが、いつのまにか東洋的「存在論」に移行している自分に危うさを感じつつ、絵画的「ものの見方」が優先される現代の中にあって、いまだに「彫刻とは何か」を模索している。

昨年、フランス（カストル国立アートセンター）での作品発表の機会を得た。今まで海外での作品発表は、フランス（リヨン）、フィリピン（マニラ）、タイ（バンコク・チェンマイ）、韓国（済州市）等で行なってきたが、なかなか時間の余裕がなく、作品を輸送するのみであった。カストル展は丁度春休みと重なり、絶好の機会に恵まれた。ドゴール空港からオルリー空港へ、オルリー空港からトゥールーズ・ブラニャック空港へ、ブラニャック空港からカストルへの長旅であったが、企画者であるリヨン大学のマリー先生の献身的なご尽力のお陰で日本現代美術の一端を紹介することができた。現地で作品に対する生の声を聞き、作品が共感をもって受け入れられたことは、大きな励みとなった。短時間の滞在であったが、カストル市民の暖かさとカストル旧市街の素朴な風景は忘れがたい。今年も、六月の三島での個展、七月の瑞浪芸術館でのグループ展、八月の浜松での日本・タイ交流展、十月の遠州横須賀街道での文化展、十二月の東京での二人展を企画していただいている。

発表し続けられる環境と我が健康に感謝しつつ、制作に励んでいる。

最後になりましたが、母校の益々のご発展を心より祈念いたします。

塞翁と蹴球

多摩大学教授

広瀬 一郎

（47回）

「藤枝東高校と言えばサッカーの名門だ」という意識は、皆さんお持ちでしょう。筆者も同様であったが、東大の合格発表の場でインタビューされた際、「藤枝東？」と怪訝な顔をされ、「一応高校サッカーでは有名なんですけど…」と多少謙遜しつつ言ったら、「東京にも有名な高校ありますよね？」…？「目黒とか国学院とか…」。インタビュアー氏は完全にサッカーとラグビーを混同していたのだ！これが一九七五年当時の日本の現実であった。サッカーなどはマイナーな競技の一つでしかなかったのである。

それが、九十三年にJリーグが発足し、状況は一変。二〇〇二年には W杯開催まで実現した。二体、誰が想像したであろうか。

筆者は、確かにサッカー部に籍を置いたが、競技者としては二流であった。それが、その後今日までサッカーとは縁の切れない一生を歩んでいるのだから、人生は分からない。

一九八〇年に電通に入社。このころ、電通は世界戦略の一環として、サッカーや五輪のビジネスに進出。八十五年にアディダス社と共同でJSLというスポーツマーケティングの会社をスイスに創立。筆者は八十四年にサッカー担当になり、八十六年W杯メキシコ大会にはJSLの一員として運営に参加。九十年のイタリア大会にも現地に赴いた。ローマで行われたFIFA総会で、「日本はW杯開催の意思あり」という冊子を配布したのは、ある意味、筆者である。そして、二〇〇二年の大会招致にも従事した。

Jリーグの創設は、ライバルの博報堂が担当した。（筆者が国際駅伝実施のため、NYに滞在している間に、博報堂に決したのだが、この話も長くなるので割愛する。）しかし、二〇〇〇年に川淵チェアマンより依頼があり、Jリーグの経営諮問委員を二期／四年務めた。

振り返ってみると、日本のサッカーの急激な変化に筆者が関わってきたと言わざるを得ない。何もこんなことを予想して東高のサッカー部に入部したわけではないが、「人間万事、塞翁が馬」の感を抱く今日この頃である。

心をこめて踊りたい

パフォーマー

松浦 希実

（77回）

私は幼い頃から習っていたバレエが大好きで、初めてミュージカルの舞台を観た小学生の頃からミュージカルの舞台に立つのが夢でした。

東高の自由な校風のお陰で、目標に向けてレッスンに打ち込むことができました。夢祭で皆さん舞台を作れたのも良い思い出になっています。

東高卒業後は、ミュージカルについて専門的に学びたいと思い、専門学校に進学し、三年間演技、歌、ダンス等ミュージカルの基礎を学びました。同じ目標を持つ仲間達と毎日レッスンし、学校公演に向けて朝から晩まで学校のスタジオに籠り練習に励みました。この三年間で、技術面はもちろんのこと、プロとして舞台に立つ心構えや、スタッフ、出演者等大勢の力によって作っていくことの難しさや楽しさを学び、自分を大きく成長させることが出来ました。

卒業後は、オーディションを受けては落ちを繰り返しながら、ミュージカルやイベント、五木ひろし特別公演などに出演し、一昨年からは、首都圏のテーマパークダンサーとして活動中です。

テーマパークでは、毎日大勢のお客様の過ごしているいます。テーマパークならではの、お客様と近い距離でのパフォーマンスはお客様の反応が良く分かり、毎回違った課題が生まれたりもします。それ以上に笑顔で本当に楽しそうに踊っている方々や瞳を輝かせながら私達と一緒に踊る子ども達を前にすると、やりがいや喜びを感じます。また、屋外での公演は、天候や気候に左右されるので、大変な時も多いのですが、どんな時でも待っているお客様がいると思うと笑顔で出演することが出来ます。

仕事としてパフォーマンスでお客様に感動や幸せを伝えるのはとても難しいことですが、常に感謝の気持ちと、初めて踊った時からの踊ることが大好きという気持ちを持ち続け、一人でも多くの方に幸せを届けられる様、いつでも最高の笑顔で、心を込めて踊っていきたいと思います。

そして将来的には、指導者となれる様、日々精進していきたいと思います。

水球事始め

野末 隆義（65回）

水球部？と思われる同窓生の皆様も多いかもしれません。平成元年度より、水泳部は水球と競泳の両方で活動しており、現在、学校のプールでは水球をメインに活動しています。

そもそも本校における水球競技の始まりは、わたしが主将になった1年の夏休み明けの頃に遡ります。当時の顧問大迫照忠先生の「水球やってみるか」と言われた一言からでした。当時、なんとなく水球という競技は知っていましたが実際にみたことはなく、調べてみると、7人で行う競技であるとのこと。さらに、当時、静岡県内には3校しかチームがなく、2位以内になれば東海大会に出場できることもわかりました。しかし、部員は4人。全く足りません。そこで、クラスの友達や水泳経験者に駄目元で声をかけてみたところ、沢山の友人が協力してくれました。これが高校1年冬の出来事です。

翌年、萩原安江先生に顧問が替わると、まず「本当に水球をやるの？」と問われました。集まってくれた友人を裏切る訳にもいかないので、当然「やります」と答えました。これが本校における水球のはじまりです。平成元年4月の出来事でした。

ボールもない、水球用の帽子もない、練習用のゴールもない、もちろん経験のある指導者もいない、そんな何もない状態からのスタートでした。ゴールは大迫先生が手作りで作ってくださいました。本当に嬉しかったです。帽子は他校に借りて試合に出場しました。最初の公式戦は40点以上差のつく試合でした。その後の県大会でコールドゲームのルールができたのも自分たちのせいではないかと今は思います。

3年時には部員もかなり増え、何とかこのチームで公式戦一勝をと個人的に思って練習に励みましたが、試合では敵のエースが指を骨折したのにもかかわらず、どうしても重い1点が届きませんでした。

しかし、自分たちが引退した後、すぐに藤枝東高校は公式戦で初勝利をあげることができました。ここからは、県2位以内になり東海大会に出場することが、目標となりました。

念願の東海大会に出場することができたのは、創部17年目の平成17年のことでした。わたしは大会役員をやっていたこともあり、その瞬間に立ち会うことが出来ました。まさに感動の一言でした。部員不足で廃部寸前に陥った時期もありましたが、2人目の顧問の藤原士郎先生が御尽力くださり、その瞬間が訪れたと思っております。

その後、石塚和章先生、佐野正文先生と顧問が変わり現在に至っています。

現在、わたしは仕事の合間に指導というほどのものではありませんが、お節介なOBとして練習に顔を出しています。今まで顧問をして下さった先生方や当時一緒に部活をやってくれた友人、現在に至る後輩たち。本当に感謝の思いは尽きません。今後も微力ながら協力していきたいと思っています。

最後に、水泳部OBの皆様へ。毎年8月14日にOB戦を行っています。時間の都合がつく方はどうぞ東高のプールにおいでください。旧友との交流を深めてみませんか。

部活動小史

新聞部、月に立つ

奥山 和弘（46回）

先日、藤枝市で講演をさせていただいたが、その担当課長は藤枝東の同級生だった。しかも同じ新聞部という縁だ。当時の話を振ると、「俺は広告取り専門で、原稿を書いたことはなかったけどね」と笑った。誇張もあろうが、それほど部員が多かったということでもある。当時、私たちの学年は19人いた。

秋の文化祭が済むと、2年生は引退する。実質、1年の秋からの1年間が自分たちの代ということになる。その私たちの代に第100号の発行がめぐってきた。私は部長だった。通常2面であったものを6面構成にして臨んだ。折しも、その夏、サッカーがインターハイで優勝した。決勝戦には応援委員5人が派遣され、その一人でもあった私は、試合が終わるや、グラウンドに飛び降り、今度は新聞部員として優勝イレブンの晴れ姿をカメラに収めた。この写真は第100号を飾った。

文化祭では「アポロ展」に取り組んだ。アポロ11号の月面着陸はその二年前、13号の奇跡の生還は1年前の出来事だった。同年には大阪万博で「月の石」が展示されている。そういう時代だった。

宇宙服は、つなぎの作業着の内側にスポンジを縫い付け、シート屋で分けてもらったシートで首元を整えた。胸にNASAのマーク、肩に星条旗を手書きで施し、腕には方位磁石まで取り付けた。背負う生命維持装置は、段ボール箱をシートで覆った上で、廃品回収業者から洗濯機の排水ホースを調達してきて差し込んだ。頭部カプセルは料理用ボウルを利用した。模造紙に月面を描いて背景とし、他の部員たちが月面車を製作した。

文化部の展示が熱く、それゆえの「文化祭」であった。そこで、一般生徒にも参加の機会をという趣旨でこの年から始まったのが「夢の祭典」である。

先ごろ母校に勤務して、わが新聞部の現状を知らされた。部員はわずか数名、入部ゼロの年度もあり、他の部からの助っ人を得てようやく発行にこぎつけていた。顧問のM先生は、パソコンを活用することで編集の省力化を図っていた。

思えば、あれから40年になろうとしている。200号もとうに過ぎている。M先生はじめ歴代の顧問の工夫と部員の努力によって「続いている」ということに、むしろ感謝すべきなのかもしれない。

小川国夫文学碑建立について

小川国夫氏の没三年を目途に故郷藤枝の地に文学碑を建立し、小川文学の素晴らしさをより多くの人々に伝え継承をしたいという考えから建立を進めています。

建立場所としては、小川氏が毎日のように散歩され、文学醸酵の地でもあった蓮華寺池湖畔に決定しております。

同窓会としてもこの考えに賛同し、発起人として名を連ねております。

以上の趣旨に賛同される方は、下記までご連絡をください。

募金目標・四百万円　一口　二千円から

（連絡場所）　藤枝市藤岡四―一六―一〇　鈴木貞子　〇五四―二三八―四三三五

「小川国夫文学碑建立の会」（会計担当）